

りびんぐらいぶず 平成31(2019)年2月第1号

宗教的行為について

ご講題

たとひわれ仏を得たらんに、十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟して、わが名を称せずは、正覚を取らじ。

(Ref '仏説無量寿経'「第十七願」註釈版聖典 p18)

はじめに

伯国での布教上の一つの問題は、外面的ではあるがキリスト教に似ているため、仏教に憧れる人達に浄土真宗の教理を説明すると必ず反発される。これはキリスト教と同じではないか。私達が求めておるのは違うんですと。これは大問題である。仏教に志す西洋人は、キリスト教と違ったものを求めている。だから布教に際しては違いを明確にする必要がある(Ref 春秋社刊『世界の中の親鸞』ゴンザルベス氏の発言、p63～64)。

北米のプロテスタントの場合は尚更である。なぜなら浄土真宗のみ教えが「信心」で表現されるとき、その立場は「ただ信仰のみ」のルターに極めて接近するからである(Ref 石田慶和著、法蔵館刊『教行信証の思想』p93～94)。この場合、信心を「委ねる心、お任せする心(Entrusting mind or Mind being disposed to)」で表現するだけでは、キリスト教との違いが語れない。

浄土真宗の教学構造を振り返ると三業惑乱後にご本山で正当視されるようになったご常教の所行説ではこの難題に対し得ない。ご常教では、信心正因 称名報恩の信前行後の構造で語ろうとするからである。

この難題に対するには浄土真宗の特徴「智慧の念仏、信心の智慧」獲得の道行きを明確に打ち出して行かねばならない(Ref 2017年11月14日龍谷大学真宗学会第71回大会基調講演、ケネス田中「欧米における浄土真宗のイメージへの反論」)。

そこで改めて能行説・所行説を振り返ると、能行説は、行巻初めの出体積「大行とはすなはち無碍光如来の名を称するなり」並びに称名破満釈「しかれば名を称するに、よく衆生の一切の無明を破し、よく衆生の一切の志願を満て給ふ」の御文によって衆生の称える称名を「大行」とする。所行説は出体出願「大悲の願より出たり」を根拠とするがこれには文献学的な難が存する。

ここでは、訓詁註釈で凝り固った頭を解き解す為にあらず、西谷啓治先生の一文を拝読してみることにはしたい。

宗教的行為について

(石田慶和『教行信証の思想』p122～125)

「行」ということは、仏教にとって大きな意味をもつものとして扱われてきた。それについて

西谷啓治先生はこう言われる

仏教が日本に伝来してから、各宗で、坐禅、止観、念仏、三密瑜伽行等、種々の「行」が現れた。(中略)それらは何れも真理である「法」(仏法)に相応した実生活と見なされ、また「法」を会得するための「道」と見なされてゐた。しかもその「法」の会得はまた自己といふものの本質的な自覚を意味してゐた。こういう「行」というものにおいて最も特徴的なことは、それがあくまで身体的な行いであるということ、及びそれが明確に「方法」の性格をもつてゐるということにある。その場合、方法ということは、単に特定の目標に達するための手段としての技巧とか技術ということではない。(中略)行の方法的性格は、行がいわば「法」から催されたものであるということを示すものだと思う。行とは、本質的にいえば、法の側から人間の在り方を限定して来たもの、限定しながら人間の上に法自らを実現して来たものである。換言すれば、行において人間は、法を自己の身を実現するのである。それは、普通の技巧や技術のように人間が勝手に案出したものではない、むしろ人間が自分の存在そのものの本質から発見したものである。(中略)宗教的な「行」の場合でも同様だと思う。行とは本質的には、真理としての「法」の現成、法による人間の在り方の規制、人間による法の知、法の知における人間の自知、というようなことを一挙に意味するのである。行が自ずから「方法」の性格を含んでくる理由はそこにある(『西谷啓治著作集』第二十巻 五八頁)。

「行」の特徴として、方法的ということと共に身体的ということも挙げたが、行における方法は身体的な行いのうちに、その行いの方法として現れる。そのことは、真理としての「法」が身体的なものの上に、つまり人間存在の底辺をなすものの上に、「かた(型)」を刻みつつ自らを実現してくるといふことである。即ち「かた」はその背後に、法が自らを実現して来た道を開いてゐる。(中略)身体的な行いが行い自身の内面から方法的な道筋を自ずと現わして来たのが「行」というものであるが、その行において、人間のなす事の正しい仕方(例えば「八正道」という如き)の「かた」のうちに、その事の理法が「法爾として自然に」現れる。呼吸や飲茶のような日常茶飯事であっても、或いは宗門的な「只管打坐」とか「称名念仏」であっても、その事は或る特定の小さな身体的行いである。我々の身体的な行いは、パスカル的にいえば、底なく涯しない宇宙の前では折れた葦の微かなそよぎにも等しい。しかしその眇たる行い自身のうちに、またその行い自身として、天地の大をもつて志しても包むことの出来ない「法」の門が開かれてゐる。そういうのが行の立場であり、行ずる葦の立場である。一つの小さな事=行に現れる理法も、全宇宙に先立ちこれを支配する「不二の」(絶対的な)法門の端的な現れであると同時に法門自身である。行は道を行くことであると同時に、道を行くこと自身が道である。真理に随つて(如法に)行うことであると同時に、その行自身が真理である。真理、真、「まこと」といわれるものは、行においてそういう性格、事理一如の性格を示してくる(同六十頁)。

「行」の立場では、真理はいつも身体的な行いを離れない。絶対的真理と言っても、我々のなす「こと」(事行)を、眞実の行い、眞実の「こと」たらしめるものとして、初めて絶対的真理である。身体的という最下層のところへ、しかも、その時その時の行いのうちへ現成して来るような絶対が真に絶対的である。もしそうでなければ、その絶対はどこかに届かぬ所を残すことになる。それでは真に絶対とは言われぬ。我々のなす「こと」を「まこと」にするものが真に絶対的な「まこと」なのである。我々の身体的な行いが「行」として「まこと」となるということは、我々の全身心がその行いのうちに集められることである。我々がその行いへ全人的に自己集中することである。それは、行いの「かた」、則ち正しい「しかた」に従って、如法に行うことであり、「法」の方から開かれた「法」への道に行くことである。その行いのうちへ全身心を集中するということは、「ただわが身をも心をも、はなちわすれて、仏のいへになげいれて、仏のかたよりおこなはれて、これにしたがいもてゆく」(道元)ということと別ではない。「行」においては、我々の行いは仏の「方」よりおこなわれる行いになる。それがまことの行いである。「行」とは、我々の行いが「まこと」になったもの、即ち我々の行いの上に絶対的な真理(法)が現成したものに外ならない(同六二頁)。

訓詁註釈学からの脱皮が必要

西谷啓治先生の一文に接するとき、曾て大行釈について行信教校で「主語のない日本語表現の大行釈では、衆生と如来の双方が主語になりうる」と仰せ下さった梯 實圓和上のご講義の素晴らしさを思い起こさないではおれない。和上は、「称えなければ、名号は働いて下さらない」とも仰せ下さった。

ここから、本願力回向で賜った大行を行わずれば(南無阿弥陀佛と称えれば)、衆生の上で大行が働き出して下さり、直ちに聞こえて下さる南無阿弥陀佛こそは如来直々のお喚び声になるのであり、衆生は煩惱濁世の今生にありつつも如来直々の本願招喚の勅命に喚び覚まされるのである」との論理が導かれる。

真宗教学の課題は、訓詁註釈的な研究方法にあることが指摘されている(Ref 石田慶和 p33)。必要なのは、現場実践に支えられた宗教哲学的着想であり論理展開力だったのである。

最後に、所行説には文献学的難が存することのみを指摘して筆を置きたい。それは標拳及び願文に立脚できていないことにある。標拳には、「名号成就の願」という文言はなく、願文には「名号が法界を流行せずば正覚を取らじ」というような文言がないからである。合掌。

仏教壮年会お聴聞の会 二月三日(日)二十時、

仏教婦人会例会二月 十六日(土)十九時半、

永代経 三月二日(土)十三時半 お客僧 本願寺派布教使 田淵幸響師

著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地

077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥